

第3回「関西建築家新人賞」審査講評

今回で「関西建築家新人賞」も3回目を迎え、賞の行く末等、特色付けを決定する大切な時期であると考えられる。そんな中、審査委員長として大役を務めることになった。

国際的な広い視野を持つ建築家の山口隆氏、そして、建築家以外の専門家に参加頂き、この賞が開かれた社会性とより客観的な評価視点を示す為に、第3者評価者として写真家の宮本隆司氏にお願いした。氏は、国際的にも注目されている写真家であり、若かりし頃から建築写真家としても活躍され、しかも建築に精通し鋭い建築批評の持ち主である。

選考にあたり、我々の長時間の討議の中で、やはり、ここでの建築家の新人賞の意味は、その作家性にあると結論づけた。ならば一体、作家性とは、何にかの論議に至り、それは、その作品が宿す建築のテーマ性、すなわち何がしかの社会に対する批評性やメッセージ性を持ち得ているかいないかだろう。更には、現代のめまぐるしく変わる時代にあって、作品が消費されない存在であり、時代を超え、かすかな光でも放つものを有するかである。これらの視点が選考の指標となった。今回、16作品の応募があり、建築家協会に相応しく、いずれも新人の挑戦的な作品が多く、力量ともどもレベルの高い中での選考であった。第一段階で10案が選出され、再度、書類を前に論議を交わし、出来るだけ現地審査の対象とする事で、書類審査の結果6作品に絞られ、現地審査することになった。最終選考では、2日間にわたる長時間の論議に論議を重ね、3人一致で以下の受賞者が決定された。

受賞作品 2点

トウフ 玉置順

塊から削り貫き空間を導き出す手法は古典的であるが、トウフという、柔らかな塊の削り貫かれた空間の捉え方は新鮮さを感じた。この作品が発表されてからほぼ10年になり、様相も古び、当時の真新しい写真の面影は失われている。しかしながら、空間の私情性が我々の心を捕えた作品であり、機能性では決して決定できない物語性を宿し、結果として空間体験の重要性が浮き上がらせた作品で、作者の語る高齢者住宅とて機能せずとも、その強い空間のメッセージ性が伺え受賞に至った。

TRAPEZOID 荒谷省午

空間は、エレメントの集積と建築素材で構成されることを再認識させられた建築である。そして、巧みな素材変化の空間表現によって住まいの多様性を導き、成功している。作者は、ここで徹底して素朴な素材にこだわり、既成品に頼らず、材料、建具、家具、小物に至る全てに、手の痕跡を感じさせるもの作りの手法に徹し、独自の世界観を完成させている。これは、なおざりに成りがちな建築家の、いつの時代にも必要な姿勢であろう。しか

しまだ、作品の形態操作のぎこちなさと素材の力に頼りきる未熟さは拭えないが、今後の発展的可能性に期待したい。

次点作品

美津村株式会社 新社屋 菅 匡史

この建築は、端正にデザインされ、快適なオフィス空間に仕上がった完成度の高い建築である。そして、透明感あふれるオフィス棟と対照的な倉庫研究等のボリューム、そして、水面と光を取り込み、これら施設との絶妙なバランスで構成し、環境的建築として全体が纏められている。はるかに新人を超えた力量が十分に伺える。ただ、ここでのこれらの巧みなシークエンス操作の演出は、体感として伝わりにくく視覚上で終焉してしまい、惜しまれたが受賞には至らなかった。

追手門学院大学中央棟 須部恭浩

この計画は、大学のキャンパス生活をも変える程の出来映えである。象徴的なセンター棟のボリューム計画から部分エレメントに至る一貫した創意と工夫があり、更には、ランドスケープを含めキャンパスの再構成がなされている。この建築自体、建築の抱えるプログラムを明快に解き明かし、総体としては群を抜けた建築であり、建築家の総合力が伺える。しかしながら、作家性を対象とした評価軸で捉えるには建築用途からして難しく、最終まで論議されたが、次点となった。

藪之下の家 中村潔

厳しい敷地条件にあって、周辺環境から閉ざされた空間でありながら、計画性だけに頼らず、構造的挑戦、空間の抽象性、光の扱いと狭小住宅ながら、可能性を感じた住宅である。これらの巧みな空間操作は、茶室の如く、閉塞感を感じさせない空間の豊かさを体感できた住宅であった。しかし、中庭の光庭の曖昧さ、そして、作家として求める建築に対する遠投の到達点が見えにくく、次作に期待する事にした。

京都型住宅モデル 魚谷繁礼

京都の市街地の住宅は、町並みや車庫等、さまざまな問題をかかえるが、真正面から挑戦的に取り組まれた現代町家としてのモデル住宅である。ローコストながら、素材の選択、中庭、伝統職人とのコラボレーションと、上質で京都のもつ場所性を生かした快適な住宅であると思えた。建築家としての責任の一旦である社会的問題に意欲的に取り組まれ、それ故に作品としての作家性は、薄れてしまい、審査の対象から外れることになった。

審査委員長 木村 博昭

候補作品の建築を一日で走り廻って見るという、疲れるけれど贅沢な経験をした。撮影のために建築を見るのは毎度の事であるが、審査のためというのは初めてだ。撮影と審査とでは建築がどのように違って見えてくるのか、わたし自身にとっても新鮮な体験だった。

現地審査当日は朝から生憎の雨で、建築を見るには条件の悪い日であったが、強く印象に残った作品は「TRAPEZOID」と「トウフ」であった。

荒谷省午の「TRAPEZOID」は、書類審査の時はそれほど印象深い作品ではなかった。だが図面や竣工写真だけでは空間構造が想像し難いところに、この住宅独自の魅力が隠されているように思えて現場を確認するのを感じた。

雨天の陰った光の中で、この住宅空間は、あらかじめ見ていた写真とは全く違って実に丁寧な細部に支えられた空間であることが分かった。複雑かと予想していた空間構成は意外にもシンプルであり、斜めの壁が空間を活性化していて、何よりも凝った細部に見るべきものが多かった。ありふれた素材にすぎない物をキメ細かく加工し、配置によって空間を変質させている。単なる手工芸的装飾に落ち入ることなく、部屋ごとに変化のある多様な表情を持つ空間を創出することに成功している。

玉置順の「トウフ」は、きっとこの住宅を見る環境としては最悪の状況で見たのかもしれない。竣工から10年の時間が経過して、正面の白い外壁はかなり汚れていた。それを雨の下で傘をさしながら眺めた。内部はといえば、居間の畳の上にはカーペットが敷かれてコタツが鎮座していた。さらに設計意図とは違って、布団ではなくベッドを使っているのだという。高齢者の居住を考慮したはずの設備や工夫は、あまり役立っているとは思えず、バリアフリーといいながら外部との車椅子用スロープは無い。何もかもが裏目に出ているように見えた。

しかし、こうした想定外の要素が重なっているにもかかわらず、この建築がわたしに与えた印象は強かった。これは住宅というより聖堂である。寝室の奥に祭壇を設ければ、そのまま礼拝堂である。広く高い天井の一室空間に、ハレとケが同時に存在している。伝統的な民家であれば保持している、聖なるものの気配を感じさせる空間であった。壁に埋め込まれた障子などの仕掛けも、そのための装置として理解できる。形態の奇抜さを目的とした建築とは明らかに違う、居住することの摂理を形にしようとする意志が込められた空間になっていた。

審査委員 宮本 隆司

西欧の理念的で操作的な建築と異なり、日本の建築はモノ性へと向かう。特に関西の建築家は、その傾向が強いような気がする。これも関西という地域の特性であろうか。今回選ばれた二人は、そういう意味で、まさしく関西の建築家であると言える。

玉置 順(玉置アトリエ) 作品名：「トウフ」

この作品は、外観はエッジのあるソリッドのように見えながら、内部は削り貫かれ、空間はまるみを帯びている。プランは立面やセクションとは異なる性格を持つ。その違いが、不思議な雰囲気を出しており、独特な空間構成と相まって魅力あるものとなっていた。この建築は幾何学的操作によってつくられてはいるようだが、印象は明らかに、そうしたもののとは異なる。書物を格納する壁、介護のためのスチールの梁など、細部に拘りが見られ、物語が散りばめられている。

10 年前の作品であるが故に、その後の作品へ影響をどの様に与えたのか、時間を逆行して考えなければならなかった。本来ならば、未来への示唆としてあるべき批評が今なされる事は不幸であると言うべきかもしれない。

荒谷省午(荒谷省午建築研究所) 作品名：「TRAPEZOID」

実際に訪れた印象は写真で見た印象と大きく隔たりがあった。気になっていた細部が不思議と空間に連動していたからだ。全体の構成は幾何学的であり、全体と細部との関係が希薄であるのだが、空間は細部と連動しているという不思議な建築であった。それぞれの細部のディテールはコンフリクトしていて、一見混沌としているように見えるのだが、空間の中でうまく解け合っていた。それが魅力となっていたのかもしれない。自邸のためか、自身の欲望だけが交配して出来たようであり、多くのものが孕んでいた。まだ自身の本質を現さずに、中に秘めている状況なのかもしれない。多分、やりたい事全てをこの作品にぶつけたのだろう。細部からはそうした拘りが主張されていた。

この二つの建築に接して、二人の批評家の言葉が私の脳裏を横切った。

日本の建築が西欧の言説と差異を持って存在することの重要性を述べたフランチェスコ・ダルコ。

ケネス・フランプトンは、建築とは、それぞれの場所から、どのように建築を思考するのかという建築の存在の意味を問う事がグローバリズム時代の均質化の波を打ち破ると説く。

均質化に向かう、このグローバリズムの時代、関西建築家新人賞が、関西という地域の特質を示していると思われる建築をつくった二人の建築家に与えられたことは意義深い。

審査委員 山口 隆